

生活指導における保育者の役割 —自由学園北京生活学校を事例に—

The Role of a Child Care Giver on Civil Life Education: A case study on Jiyu Gakuen Peking Life School

山本 一生
Yamamoto Issei

キーワード：生活指導、保育者の役割、自由学園、北京生活学校、幼児生活団、華北交通写真

本稿では日本占領下の北京において、自由学園北京生活学校を対象に生活指導における保育者の役割を考察することを目的とする。同校は羽仁もと子（1873-1957）によって1938年5月に北京で設立された。そこで本稿では華北交通写真コレクションを用い、同校の生活指導に関わる教育実践について、日本語教育と幼児生活団での保育実践を明らかにする。考察の結果、以下の知見を得た。第一に、日本語指導法については、母語ではない日本語を中国人学生に指導する直接式教授法であった。第二に、北京生活学校幼児生活団での教育実践では、指導者が直接集団指導を行う場面と、指導者は見守ることに徹し、できるだけ子ども達自身で活動できるようにしていた場面とがあった。東京目白の自由学園において幼児生活団での暮らしを子ども達自身の手で行うことが目指されたが、この理念を北京生活学校幼児生活団での幼児教育において実践していたことを示すと考えられる。

はじめに

2008年に改定告示された『保育所保育指針』において、例えば3保育の原理（一）保育の目標では「健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと」とあるように、「生活習慣」は保育において重視されてきた。生活習慣を指導する役割を担うのが、保育者である。しかし、生活指導は現在において初めて重視されていたわけではない。周知のように幼児の自発生活を尊重して「生活を、生活で、生活へ」導くことを主張した倉橋惣三をはじめ、戦前から生活指導は重視され、今日に至っている。

とはいえ、日本の保育は日本国内のみで完結していたわけではない。日露戦争後の1905年に

ロシアから関東州の租借権を継承して日本は中国大陸への足がかりを得た。1931年の満洲事変をきっかけに翌1932年に満洲国が「建国」され、さらに日中戦争勃発後に日本が中国華北部を占領すると、その影響は華北部にも及ぶこととなった。

そこで本稿では日本占領下華北部における主要都市であった北京において、自由学園北京生活学校（以下単に「北京生活学校」と表記する）を対象に、生活指導に関わる教育実践の具体的側面を明らかにすることを目的とする。同校は羽仁もと子（1873-1957）によって1938年5月に北京で設立された。自由学園は、「生活即教育」を掲げて学校法令に準拠しない各種学校として羽仁もと子によって1921年に東京で設立された。

では先行研究を整理しよう。まず斉藤道子による羽仁もと子の人物史に、北京生活学校への言及がある¹。管見の限りでは北京生活学校を主に扱った論文は5本である。北京生活学校の設立過程を分析した太田孝子²と王娟³の研究、運営と教育活動を扱った王娟⁴と李紅衛⁵の研究、北京生活学校の教育思想を分析した内田知行⁶の研究である。

いずれの研究も設立過程に注目し、国策に協力したか、または民間の交流だったかといったように、北京生活学校を政治的に評価するきらいがある。そのため北京生活学校の教育実践の具体的側面を問う研究は見られない。本稿は、自由学園の北京での保育実践を現在の視点から政治的な評価を下すことを目的としない。また自由学園設立者の羽仁もと子がキリスト教徒であり、北京生活学校もキリスト教の影響があったという見方があるが⁷、本論では羽仁の宗教心と北京生活学校との関係については言及しない。あくまで、北京生活学校でどのような実践が行われたのか、その足跡を辿ることで保育者の役割について考察することを本稿の目的とする。

本稿では、主に以下の2つの史料を用いて北京生活学校の実像に迫る。第1に『北支画刊』（平凡社発行、1938年4月～12月）およびその後継誌『北支』（第一書房発行、1939年6月～1942年8月）と『華北』（日本出版配給、1944年1月～12月）といったグラフ誌である。第2に、それらに掲載された写真資料である⁸。

京都大学人文科学研究所にはこうしたグラフ誌に掲載された写真の元となったフィルム焼付写真とネガが合わせて3万6000点あまりが収められている。本論ではこれを華北交通写真コレクション（以下単に「コレクション」と略記する）と呼ぶこととする。その中には多くの教育現場を撮影した写真が含まれている。本論で「コレクション」から引用する際には、台紙に付された通し番号を付記する。このうち、北京生活学校に関する写真が管見の限りでは121枚収められている。

以下では、第一章で北京生活学校の設立過程がいかなるものであったか制度面から分析し、第二章で北京生活学校での教育実践について、日本語教育と北京生活学校内に附設された「幼児生活団」を取り上げ、幼児に対する生活指導がいかなるものであったのか明らかにする。

1. 北京生活学校の設立過程

1.1 北京生活学校の開学

本章では新しい知見を提示するというより、次章以降の「コレクション」を用いての教育実

実践分析を位置付けるために、先行研究を元に北京生活学校の設立過程の確認をすることを目的とする。

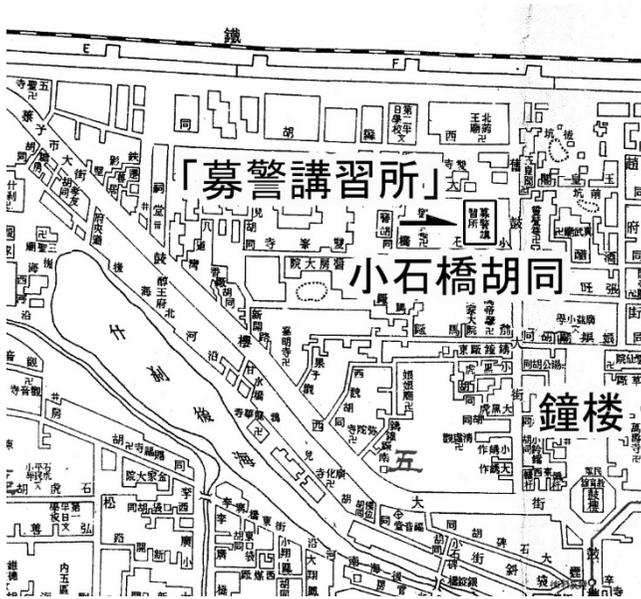
1932年2月に羽仁もと子は中国で自由学園のような学校を創りたいと明言したという⁹。1934年、元在東京中華民国YMCA総領事の馬伯援が日本を訪れ、羽仁吉一との間で留学生を交換することとなった¹⁰。馬と自由学園との関係は、馬の長女・馬必寧が1927年から1932年まで自由学園に在籍していたことがきっかけであった¹¹。その結果山室善子が馬のいた武昌に派遣され、自由学園の「生活即教育」の中国での展開が期待された。1937年に日中戦争が勃発し、同年末に首都南京が占領されると、本格的な大陸経営に伴い文化工作を始めよという意見が日本国内で強くなった。こうした流れの中で、1938年4月に『婦人之友』にて創業35周年記念事業として北京生活学校を創ることを発表した。そして学園高等科の新卒業生が北京生活学校の設立に当たった。

日本側の組織が日本軍占領下の北京で文化事業を展開するためには、軍と外務省といった日本側機関や、北京市といった中国側機関の支持が必要であった。まず北京市長兼警察局長の余晋猷から北京市旧鼓楼小石橋胡同内にあった二千坪の広さのある警察訓練所として利用されていた部屋を無償で借りることができた。また開校直前には「自由の名など論外である」と断じられ、北京生活学校という名称での開校不許可を通告されたが、羽仁もと子は軍司令部や軍特務機関と交渉の末、軍は黙認という対応を採ったという。結局1938年5月15日に北京生活学校は開校式を挙行し、来賓として先の余晋猷や、外務省の原田龍一書記官らが列席し、開校式に寄せた祝電には平生鈞三郎（貴族院議員、北支派遣軍最高顧問）や湯沢三千男（北支臨時政府業生顧問）らの名があったという¹²。このように、北京生活学校は日中の関係諸機関の支持を得

て、開校に至った。

では、北京生活学校はどこで設立されたのだろうか。『最新北京市街地図』（春明堂書店、1938年3月）には、内五区の小石橋胡同に「募警講習所」という名が見える【図1】。ここが先に見た「北京市旧鼓楼小石橋胡同内にあった二千坪の広さのある警察訓練所」で、北京生活学校が設立された場所だと考えられる。なぜこうした広大な敷地を無償で借りることができたのか疑問はあるが、先行研究ではこれ以上の言及はない。また、本稿

【図1】 自由学園北京生活学校所在地



『最新北京市街地図』（春明堂書店、1938年3月）を元に筆者作成。

では設立過程に新たな知見を加えることが目的ではないため、あくまで地図上での校舎の位置を確認するに留める。

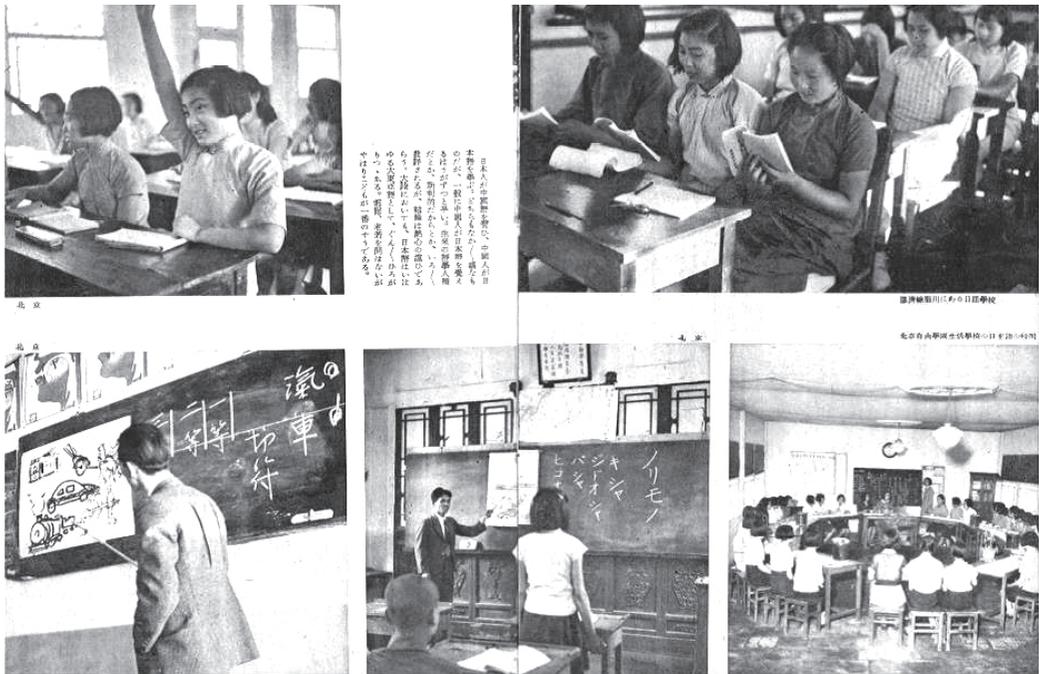
1.2 北京生活学校の教育理念と生徒募集

1938年5月の開校にあたり、生徒募集要項が出された。『婦人之友』1938年6月号にその要点が掲載された¹³。それによると、募集人数は20名、性別は女、年齢は15～18歳、応募資格は小学校卒業者、修業期間は3ヶ月で、寄宿舎に住むことを条件に学費は不要であった。ただし修業期間は1939年に6ヶ月に、1943年に1年間に延長され、入学倍率も1期生の4倍から10期生の約16倍にまでになった¹⁴。また北京生活学校は「日支両国民融合の機関」として自由学園によって「1. 共に言葉を学ぶ 2. 共に生活を学ぶ 3. 共に技術を学ぶ」という三項目の下に設立される、とした¹⁵。北京生活学校では指導者と起居を共にしながら、言葉、生活、技術を学ぶ方式を採用したが、太田によるとそれは自由学園が行ってきたセツルメント活動や生活合理化運動の国際版だという。セツルメント運動との連続性が指摘されているが、本稿では教育理念の紹介に留める。

2. 北京生活学校の教育実践

2.1 日本語指導法

【図2】「日本語を学ぶ」



『華北』創刊号、1944年2月。

北京生活学校の教育理念の一つに「共に言葉を学ぶ」を掲げていたが、では日本語教育はいかなるものだったのだろうか。太田によると、一期生は最初の一ヶ月は中国語を媒介とした授業を行ったが、生活に必要な日本語を直接的实际的に学習する方法を採り、生活を通しての日本語教授法で「自由学園の精神」を中国人学生は学んだという¹⁶。なお、華北占領地で行われていた日本語教授法は①直接式教授法②対訳式教授法③直接対訳併用式教授法の三方式であった¹⁷。すなわち、北京生活学校では当初は③の方式を採用したが、徐々に①に移行したと言える。

【図3】北京生活学校での日本語指導



No.18973 撮影者、撮影日不祥

では、「コレクション」とグラフ誌から、北京生活学校の日本語教育を見よう。『華北』創刊号（1944年2月）には「日本語を学ぶ」と題するページがある【図2】。その見開きページの右下に「北京自由学園生活学校の日本語の時間」と題する写真が掲載されている。管見の限りでは「コレクション」に元となった写真を見つけることはできなかった。しかし同ページのこの写真に拠れば、黒板の前に教師がおり、机を円状に並べ、机一卓に3人の生徒が着席している。教室の壁には「自由学園北京生活学校の地図」が貼られている。机の上には茶碗と箸が並べられていることから、食事作法の授業を日本語で行っていると思われる。

他に「コレクション」には中国人女性と思われる教師が黒板に「五月二十日 きょうは一年のなかで一番大切な日です私達は毎」と書いている写真がある【図3】(No. 18973)。黒板に書いている途中であるためこの先の文はわからず、なぜこの5月20日が一年の中で一番大切な日なのか不明だが、日本語で日本語を教える、直接式教授法を採用していたと思われる。

2.2 北京生活学校幼児生活団

北京生活学校において特徴的な教育実践は、以上見てきた生活教育にとどまらない。さらに、幼児教育を行ったのである。

1939年1月、東京目白において羽仁もと子と長女説子を中心に「幼児生活団」が創設された¹⁸。「生活団」とあるように、生活講習として幼児生活団での暮らし全てをできるだけ子ども達自身の手で行うことが目指された¹⁹。幼児生活団は1939年に目白で創設された後、淀橋（東京）、神戸、大阪など日本各地でも設立された。1938年12月に北京生活学校の卒業生が日本の自由学園

【図4】「日本人指導の下に」



に下の導指人本日

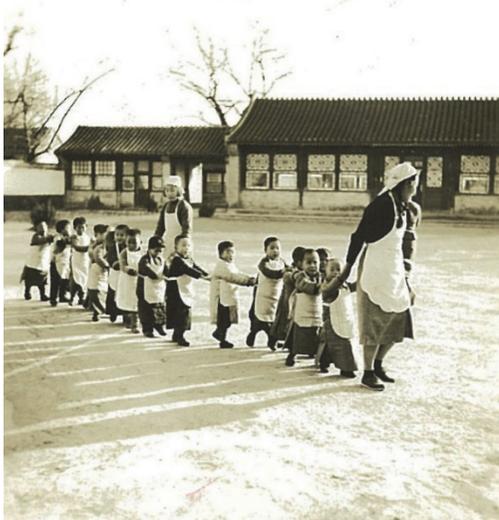
Under the Benevolent

事場々我々、指導員生活に、
A 職員生活に、
は一掃して、正行は、
之五端と、日本人の、
訓は、
して、
北は、
は、
る、
は、



『北支』1941年5月号

【図5】「汽車ポッポで御部屋に帰る
／北京生活学校託児所」



に留学し、翌年1月から始まった幼児生活団を見学した²⁰。その結果、北京生活学校内に北京小石橋胡同の4歳から6歳の子ども20名を集め、1939年11月18日に北京生活学校において幼児生活団が開校された²¹。北京生活学校幼児生活団での「教育内容は生活講習であり、日本の幼児生活団と同様のカリキュラムが実施されたようである」と菅原は推測する²²。しかし根拠となる資料は示しておらず、曖昧な指摘に留まっている。

では、「北京生活学校幼児生活団」とはどのような実践だったのだろうか。「日本人指導の下に」（『北支』1941年5月号）と題するページ【図4】では、北京生活学校の洗濯や壁の修理の様子と並んで、「北京生活学校幼児生活団」が紹介されている。この記事の元となった「コレクション」の該当焼付写

No.25228 1939年12月安福撮影

真【図5】(No.25228 1939年12月、安福撮影)の説明書きではさらに「汽車ポッポで御部屋に帰る／北京生活学校託児所」と書かれている。【図5】は幼児生活団が開設されて1ヶ月後に撮影されていた。北京生活学校が新しい教育実践を始めたことに対して、華北交通のカメラマンが派遣されたものと思われる。

【図6】手洗いをを行う幼児



No.25378 撮影者、撮影日不祥

【図7】「洗面器を持ってお庭へ」 ／北京生活学校託児所」



No.25376 1939年12月安福撮影

北京生活学校に指導者として関わった自由学園女子部卒業生は合計33名で、そのうち中国人は遅伯昌と殷韶の2名であった²³。遅は1938年4月卒業の16回生であった²⁴。また遅は「自由学園北京生活学校簡章」に「自由学園経済系」を卒業した指導者として名を連ねた²⁵。殷は1940年から41年頃に自由学園高等科に留学し、1941年4月に第19回生として卒業後、北京生活学校の教員に志願した²⁶。李紅衛は北京生活学校における教育実践で最も大きかった成果として「留学生の手による子供生活団の誕生」を挙げている²⁷。「コレクション」にて撮影された北京生活学校幼児生活団の指導者2名のうち1名は遅伯昌である可能性もあるが、今のところ確証はない。

以下では、グラフ誌には掲載されなかったが、「コレクション」に収められた北京生活学校幼児生活団の写真から、教育実践と保育者の役割を考察する。太田によると、「児童生活団」では子ども達に指導者が手や顔を洗うことを教え、体操や砂遊び、お絵かきなど日本の保育園で見られていると同様の光景が見られるようになった、という²⁸。管見の限りでは、「コレクション」での北京生活学校幼児生活団を写した写真は10枚である。紙幅の関係からその全てを載せることはできないが、保育実践を視覚的に記録したこれらの資料は貴重であると考えられる。

【図6】(No.25378)は、手洗い指導の様子である。指導者は写っていないものの、

4人の男児が手を洗っている様子が撮影されている。写真中央の男児は洗面所で丹念に両手の指を洗っている様子が分かる。

さらに【図7】「洗面器を持つてお庭へ／北京生活学校託児所」（1939年12月安福撮影、No.25376）を見ると、先に見た「汽車ポッポ」と同様に白いエプロンを着けた男児が洗面器を持ちながら一列になって庭に出てきている様子が撮影されている。庭に続く門の背後には、指導者が幼児に注意している様子が窺える。手や口の動きが見られないことから、直接幼児に指示を出すのではなく、あくまで幼児が自発的に行動する様子を見守ることに徹し、子ども達自身で活動できるようにしていたと思われる。

【図8】室内での遊戯



No.25378 撮影者、撮影日不祥

【図8】(No.25378) は室内での様子である。やはり揃いの白いエプロンを着けている。壁には幼児が制作したと思われるリンゴや顔、花といった制作物が飾っており、それを幼児達が眺めている。制作物を見ることで、振り返りを促していると思われる。また写真上方には現在も保育現場で見られる輪つなぎが飾られている。幼児の足下に注目すると、布靴だけでなく革靴を履いていることが分かる。

以上の写真史料を見ると、北京生活学校幼児生活団の教育実践は「汽車ポッポ」のように指導者が集団活動を直接指導する場面と、「洗面器」のように指導者は見守ることに徹し、できるだけ子ども達自身で活動できるようにしていた

場面とがあった。東京目白の自由学園において幼児生活団での暮らしを子ども達自身の手で行うことが目指されたが、この理念を北京生活学校幼児生活団での幼児教育において実践していたことを示すと考えられる。

おわりに

本稿では「華北交通写真コレクション」と『北支』『華北』といったグラフ誌を用い、自由学園北京生活学校と、同幼児生活団の教育実践を分析し、そこに現れた生活指導における保育者の役割を考察した。これまでの研究では『婦人之友』といった文献史料、檔案館史料、口述資料によって北京生活学校の教育実態を明らかにしようと試みられてきた。しかし、写真史料を用いて北京生活学校の教育実践を明らかにしようとした研究はこれまでになく、本稿によって同校の新たな一面が明らかにできたと考える。そこで本稿での分析結果を以下にまとめ、今

後の課題を示すこととする。

第一に、日本語指導法については以下のことが明らかとなった。「コレクション」では黒板の前に教師がおり、机を円状に並べて食事作法を日本語によって行っていた様子や、黒板に日本語文を書いていく様子が撮影されている。このように、北京生活学校での日本語指導法は、中国人学生に母語ではない日本語を指導する直接式教授法であった。

第二に、北京生活学校幼児生活団での教育実践では、「汽車ポッポ」のように指導者が集団活動を直接指導する場面と、「洗面器」のように指導者は見守ることに徹し、できるだけ子ども達自身で活動できるようにしていた場面とがあった。東京目白の自由学園において幼児生活団での暮らしを子ども達自身の手で行うことが目指されたが、この理念を北京生活学校幼児生活団での幼児教育において実践していたことを示すと考えられる。

今後の課題として、北京生活学校幼児生活団の他の活動の詳細や、幼児が共通のエプロンを着けていた理由、幼児生活団は男児のみだった理由を明らかにしたい。さらには、北京生活学校での技術教育の具体相に迫りたい。

注

- ¹ 齊藤道子『羽仁もと子—生涯と思想』ドメス出版、1988年。
- ² 太田孝子「自由学園北京生活学校の教育：日中戦時下の教育活動」『岐阜大学留学生センター紀要』創刊号、1999年。
- ³ 王娟「自由学園北京生活学校の設立について」『鶴山論叢』第10巻、2010年。
- ⁴ 王娟「戦時下北京における中国人女子教育の一考察：自由学園北京生活学校の教育活動を中心に」神戸大学『国際文化学』第22号、2010年。
- ⁵ 李紅衛「戦時下の日中教育文化交流に関する一考察：自由学園北京生活学校(1938～1945年)を中心として」『アジア教育史研究』第13号、2004年。
- ⁶ 内田知行「共生の思想—戦時下の自由学園北京生活学校」『日本植民地研究』第11号、1999年。
- ⁷ 内田前掲論文、pp.23-24。
- ⁸ 華北交通写真コレクションと『北支画刊』『北支』『華北』との関係は、松本ますみ「モンゴル人と「回民」像を写真で記録するという事——「華北交通写真」から見る日本占領地の「近代」——」(楊海英編『交感するアジアと日本』静岡大学人文社会科学部・アジア研究センター、2015年、pp.35-37)に言及がある。
- ⁹ 王前掲「戦時下北京における中国人女子教育の一考察」、p.119。
- ¹⁰ 齊藤前掲書、p.291。
- ¹¹ 王前掲「自由学園北京生活学校の設立について」、p.7。

- ¹² 王前掲「戦時下北京における中国人女子教育の一考察」、pp.119-120。
- ¹³ 太田前掲論文p.7より再引用。
- ¹⁴ 内田前掲論文、p.26の「表1 生活学校の志願者数・入学者数・卒業者数」を参照のこと。
- ¹⁵ 太田前掲論文p.7より再引用。
- ¹⁶ 太田前掲論文、p.9 ; p.11。
- ¹⁷ 「華北に於ける日語教師養成状況並に天津、済南、徐州、開封の各地学校に於ける日本語教授法調査」『調査月報』第2巻第6号、1941年6月、p.353。
- ¹⁸ 菅原然子「幼児生活団の設立経緯－羽仁もと子・説子の幼児と母への働きかけ－」『生活大学研究』vol.1、2015年、p.54。幼児生活団は発足段階から幼児の教育機関という考えはなく、そのため自由学園附属の幼児教育機関でもなかったという (p.65)。
- ¹⁹ 菅原前掲論文、p.64。
- ²⁰ 菅原前掲論文、pp.65-66。
- ²¹ 王前掲「戦時下北京における中国人女子教育の一考察」、p.126。なお、王は「児童生活団」と表記し、菅原は「小朋友会（子供生活団）」、太田は「児童生活団」、内田は「子供生活団」と表記している。しかし斉藤前掲書では「生活学校は生徒の父母や近隣の人へと輪をひろげて小朋友会をつくり、さらに児童生活団も組織した」(p.294)とし、太田は「近隣の少年や児童生活団の卒業生によって「小朋友会」が作られた」(p.12) 李は「一九四十年八月ごろから付近の小学生を対象とした「小朋友会」を設立」(p.82)したとある。このことから、「児童生活団＝子供生活団＝幼児生活団」とは言えるが、これらの組織と「小朋友会」は別組織であったと考えられる。本稿では以上の考察から「北京生活学校幼児生活団」として分析するが、「小朋友会」との関係などその詳細は今後の課題とする。
- ²² 菅原前掲論文、p.66。
- ²³ 王前掲「戦時下北京における中国人女子教育の一考察」、p.122。
- ²⁴ 内田前掲論文、p.27。
- ²⁵ 李前掲論文、pp.76-77。
- ²⁶ 内田前掲論文、p.24。
- ²⁷ 李前掲論文、p.81。
- ²⁸ 太田前掲論文、p.12。